

音楽科の思考力を高めるパフォーマンス課題の開発 ー我が国の伝統音楽とICTをつなぐ創作課題ー

地域教育支援部 研究主事兼指導主事 浅井 ちとせ

要約

平成29年3月に中学校学習指導要領が告示され、中学校においては令和3年4月より全面実施となり、教育課程で音楽を学ぶ意義について目標や内容に明示された。

昨年来のコロナ禍によって音楽活動が制限される中、学校で音楽を学ぶ意義が改めて問い直されたところである。飛沫感染対策として歌唱活動や一部の器楽活動が制限される中、音楽科の学習における「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成」を実現させる指導事例を具体的に示したいと考え、昨年度に引き続き、本テーマを設定した。

本年度の当センター和楽器実技講座「一本の弦から奏でる箏の基礎」において、和楽器の奏法等と我が国の自然や風景等のイメージとの関連を知覚・感受し、和歌や古典随筆等に箏を用いてBGMを創作する音楽科講座を実施した。

次年度のセンター音楽科講座「箏実技×ICT音楽創作」講座では、「六段の調」の「初段」の実技を通して、奏法や構成から感受したイメージを再構成する。「初段」のモチーフをタブレットの音楽創作アプリケーションを使って、表したいイメージに編曲し、アウトプットする題材構想を提案する。また、音楽創作アプリケーションを用いた編曲アイデアの活用効果を次年度講座によって検証し、課題を明らかにしたい。

キーワード：資質・能力の具現化、奏法、イメージ、音楽創作アプリケーション

1 はじめに

平成29年3月に中学校学習指導要領が告示され、中学校においては本年度4月より全面実施となった。コロナ禍によって音楽活動が制限される中、学校で音楽を学ぶ意義が改めて問い直された。そこでコロナ禍での音楽科の学習における「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成」を実現させる指導事例を具体的に示したいと考え、昨年度に引き続き、本テーマを設定した。

本年度の当センター和楽器実技講座「一本の弦から奏でる箏の基礎」では、箏の初心者が1本の弦で表現できるさまざまな奏法を学び、各奏法が表すイメージを想起しながら、学んだ奏法を生かして古典作品に箏を使ったBGMを創作する講座を実施した。受講者の実施報告から、鑑賞活動と表現活動の関連の効果性や、奏法とイメージを関連させた創作活動の楽しさの感受等を見ることができ、本講座のねらいである「箏の基礎技能を身に付け、箏を用いた音楽創作を通して、和楽器の効果的な指導方法を考える」はおおむね達成されたことを確認した。

次年度のセンター音楽科講座「箏実技×ICT音楽創作」講座では、「六段の調」の「初段」の箏実技の後に、実技を通して感受したイメージからさらに新しいイメージを再構成し、タブレットの音楽創作アプリケーションを使って「真夏の太陽の下のポップな初段」や「荒海を雄々しく進む船上の初段」等のように、「初段」の冒頭の旋律モチーフを表したいイメージの「初段」に編曲し、アウトプットする題材構想を提案する。また、音楽創作アプリケーションの編曲音源としての活用効果や課題について、創作過程や実施報告から検証したい。

2 学校で音楽を学ぶ意義の協議～当センター講座「実技どんとこい！」より～

本年度の当センター講座「小学校実技どんとこい！音楽科&図画工作科～器楽&絵～」(7月28日実施)の「わくわく器楽」において、新型コロナウイルス感染症対策としてグループを分けて、人数制限を行いながら、打楽器を中心とした器楽講座を実施した。

本講座の冒頭で「コロナ禍で音楽活動が制限される中、音楽の授業で『器楽分野』を扱う意義は何だと思えますか？」という発問をした。

受講者からは「音楽室で、家庭にはないさまざまな楽器に出会って実際に演奏できる楽しさ」、「楽器の演奏による多様な音色の感受」、「人間の声では不可能な音域の演奏の実現」、「合奏の楽しさやパートの役割の実感」など、器楽の学習を行う意義について多様な意見を聞くことができた。このようにコロナ禍にあっても器楽の学習を行う意義を見出した上で、児童が表したい思いや意図を多様な音色や奏法で工夫する授業の在り方を考えた。

器楽指導において重要なことは、単に児童生徒が楽器を練習し、上達することだけではなく、楽器で表現したい具体的なイメージをいかに深め、自ら工夫するかという点にある。そのために指導者は児童生徒が表したい思いを掘り下げることができるような効果的な学習課題を考え、音色や奏法等を工夫させることが大切である。

児童生徒が表現したいイメージを深めて交流する授業支援アプリケーションや、楽器の音色や奏法を試行錯誤しながら、音楽表現を工夫する音楽創作アプリケーションの効果性を次年度講座で模索し、検証したい。

3 当センター講座「一本の弦から奏でる箏の基礎」から次年度講座「箏を奏でよう×タブレットで箏変奏曲を創ろう」への接続～

(1) 当センター講座「一本の弦から奏でる箏の基礎」の概要

音楽科授業での創作活動において大切なことは、表したいイメージをどのような調性、音色や奏法、旋律等で表現するか、その着想である。当センター講座では、令和2年度に続き、和楽器実技として箏の実技講座を実施し、箏の初心者が1本の弦で表現できるさまざまな奏法を学び、それらの基礎奏法を用いて、表したいイメージを箏で音楽表現する講座を実施した。以下はその概要である。

日時：令和3年8月25日(水)午後1時～同5時

会場：京都府総合教育センター北部研修所 大研修室

講座のねらい：箏の基礎技能を身に付け、箏を用いた音楽創作を通して、和楽器の効果的な指導方法を考える。

ア 研修内容

(7) 講義「和楽器の表現と鑑賞の関連を図った題材構成」

筆者がスライド資料等で、以下の指導事例を提示しながら講義を行った。

a 器楽と鑑賞

題材「情景を表す奏法を見つけよう」教材「巢鶴鈴慕」（尺八楽）

- ・尺八の奏法がどんな様子を表しているか、イメージと奏法の関連を考える。

b 鑑賞と創作

題材「浮世絵版画の印象を音楽創作ソフトを使って音楽で表そう」

教材 C. Debussy 作曲 交響詩「海」（LA MER）

C. Debussy 作曲 ピアノ組曲「版画」より「雨の庭」

○指導の流れ

- ・第1時 鑑賞活動：C. Debussy 作曲 交響詩「海」（LA MER）

C. Debussyは、1867年のパリ万博に出展された日本の浮世絵にインスピレーションを受け、作曲のモチーフとした。交響詩「海」は葛飾北斎の「富嶽三十六景『神奈川沖波裏』」のイメージを基に作曲された。「神奈川沖波裏」のデジタル画像を画面に写しながら「海」第1楽章を鑑賞し、波を表す連符やアルペジオ、付点リズムや2度音程のモチーフ等から表現している波の様子を想起させ、リズムや音階から日本の伝統的な音楽との共通性を見出す。また静かな海の様子や怒濤のうねりを表す場面の音楽表現の工夫や和声感にも気付かせる。

- ・第2時 創作活動：基にする絵画 歌川広重作「大はしあたけの夕立」

浮世絵の印象から想起した音楽モチーフを反復・変化させ、単旋律あるいは副旋律で音楽創作アプリケーションに入力して創作する。

- ・第3時 鑑賞活動：C. Debussy 作曲 ピアノ組曲「版画」より「雨の庭」

武満 徹作曲 ピアノ曲「雨の樹 素描」

2曲が表す雨のイメージを比較し、それぞれの音楽の特徴を知覚・感受しながら、味わう。

(4) 実技Ⅰ「一本の弦から和の響きを奏でよう」（レジュメより）

箏演奏家よりさまざまな奏法について、実技指導を受けた。

○一本の弦による奏法

- ・すくい爪 ・引き色 ・押し手（強押し） ・押し手（弱押し） ・後押し
- ・突き色 ・トレモロ ・ピッチカート

○特殊奏法

- ・引き連 ・流し爪（カーラリン） ・スリ爪（ズーズー） ・輪連

(4) 実技Ⅱ・研究協議「箏の基本奏法を生かして音楽を創ろう」（レジュメより）

○課題：以下の句や歌舞伎等のセリフを選び、箏の奏法を使って旋律を創ったり場面に合うBGMを創ったりしよう。

<百人一首>

- ・瀬を早み 岩にせかるる 滝川の われても末に 逢わむとぞ思ふ
- ・月見れば 千々にもものこそ悲しけれ わが身ひとつの 秋にはあらねど

<万葉集>

・天の川 梶の音聞こゆ 彦星と 織女（たなばたつめ）と 今夜逢ふらしも
<「枕草子」第六十四段>

草の花はなでしこ。唐のはさらなり、やまとのもいとめでたし。をみなへし。
桔梗（ききょう）。あさがほ。刈萱（かるかや）。菊。壺堇（つぼすみれ）。
<歌舞伎「桜門五山桐（さんもんごさんのきり）」より>

絶景かな絶景かな。春の眺めは価（あたひ）千金とは小（ちい）せえ小せえ。
この五右衛門（ごえもん）の目から見れば価万両（あたひまんりょう）、万々
両（まんまんりょう）。日も西山に傾きて、雲とたなびく桜花（さくらばな）、
あかね輝く この風情（ふぜい）、はて麗（うら）らかな 眺めじゃなあ。

イ 受講者の受講報告より

- ・鑑賞で得たことを生かして表現していくためには、奏法や音色、強弱や速さなどに着目させていくことが大切だと思いました。イメージと音楽の要素を常に関連させたいです。箏にはたくさん奏法があり、それに伴って音色が豊かに変化することを実感できました。これは実際に楽器をさわってみること、他の方の演奏をたくさん聴いてみて実感できたことです。（小学校）
- ・様々な技法を実際に試したり聞いてみたりする中で、イメージや様子に合わせて組み合わせ表現することがとても楽しかったです。同じ技法でも感じ取り方がさまざまに違い面白かったです。なんとなく言われたものを演奏するではなく自分で表現したいイメージを持ち、いろいろな音を試し工夫して組み合わせると新しく音の感じや特徴を感じる感じ取ることが多く充実した学習になるなと思いました。また人の表現の良さも感じる事ができ、自分自身の幅を増やすことができるなと思いました。（小学校）
- ・今回、この講座を受講希望した目的が、コロナ禍で歌唱や器楽活動の制限の中で弦楽器の奏法を学んで指導に生かしたいと思ったことだったので、大変意義がある内容になりました。箏の基本奏法を使って百人一首や万葉集に合う演奏を探索し、イメージを音に表す楽しさを感じ、素晴らしい楽器だと理解しました。他教科と合わせたり、地域に声をかけたりして、日本の楽器に触れる機会を作っていく学校の役割も知りました。和楽器の効果的な指導を具体的に知り、子供たちが生き生きとした活動になるように本講座の内容を広めたいです。（小学校）
- ・演奏するとなると、楽譜が読めないと演奏できないと思っていたけれど、音を探しながら奏でてみようという投げかけだったので、初めてでも楽しみながら奏でることができました。コロナ禍でなかなか音楽の授業ができないと思っていましたが、ICTを使って音楽づくりができると教えていただいたのでやってみようと思います。（小学校）
- ・鑑賞を通して新たな表現の仕方に気づき、それを自分の演奏に生かしていくというサイクルを意識して学習計画を考えていきたい。箏に触れることも初めてだったので、まずその音色に感動した。1本の弦をはじくだけであるのに様々な奏法を用いることで表現が一気に広がることに驚いた。音楽創作に真剣に取り組んだのは初めてかもしれない。箏の音色と奏法を生かして音楽づくりをする事は大変

- 難しかったが、完成したことと先生に振り返りを頂けたことはとても嬉しかった。古典の音楽を短時間で終わらせることが多く、なかなかその良さを子供に伝えることが難しい。しかし本日私はその良さを経験することができたので、簡単なことからでも日本の古来の音楽を子供たちに広げる努力をしていきたい。(小学校)
- ・百人一首や万葉集など日本の風土を生かしたものに箏の音色と奏法を生かしてイメージに合う旋律をつくることで、技法として学んだことを実際に表現でき技法についてより深く理解することができると思った。(中学校)
 - ・平易な教材で奏法を試すとイメージが膨らむことが分かった。(高等学校)

ウ 本講座の総括と次年度講座への課題

本講座のねらいは「箏の基礎技能を身に付け、箏を用いた音楽創作を通して、楽器の効果的な指導方法を考える」とし、受講報告からほぼねらいは達成できたと考ええる。受講申し込みは16名だったが、当日は4人が欠席となり12名(小学校8名、中学校2名、高等学校2名)の受講者であった。

講義「和楽器の表現と鑑賞の関連を図った題材構成」では、上記(ア) a bをはじめとして、ICT活用を含めた題材構成の事例や生徒のワークシート等を示した。題材のねらいを達成するために、表現と鑑賞を関連させて題材構想する効果性は生徒のワークシートの記入例の提示等によって伝えることができたが、音楽科の授業においては、児童生徒が楽曲の特徴を知覚・感受したことを言語化して友達と共有し、音楽のよさや価値を認識する過程が鍵となる。

実技Ⅱにおいては、実技Ⅰで習得した箏の基礎奏法を活用して、旋律等を創作し、演奏発表した。今回、小学校籍の受講者は箏の体験が初めてであったが、全員が実技Ⅰで身に付けた奏法を使って実技Ⅱで楽曲を創作し、発表することができた。演奏に際しては、イメージの基とした出典と創作した旋律及び使用した奏法の根拠について、イメージと関連付けて発表してから演奏に臨んだ。同じ出典を選んだ受講者同士にとっては、出典から受けるイメージの違いに興味がわき、楽しかったという意見や、生徒の創作活動にも応用できるという意見があった。

次年度講座は、楽曲の旋律や奏法のイメージ化に焦点を当てながら、実技Ⅰでさらに幅広い奏法を習得し、タブレットを使って編曲する実技を企画する。

(2) 次年度講座「箏を奏でよう×タブレットで箏変奏曲を創ろう」企画概要

日時：令和4年8月23日(火)午後1時～同5時

会場：京都府総合教育センター北部研修所 音楽実習室

講座のねらい：箏の奏法を生かした技能を身に付けると共に、タブレットを用いた変奏曲の創作を通して、伝統音楽におけるICTの効果的な活用方法を考える。

ア 研修内容

(ア) 実技Ⅰ「『初段』を奏でよう」

ねらいを「箏の実技を通して、効果的な箏の演奏技能を身に付ける。」とし、押し手や引き色等の箏の各種の奏法技能を身に付け、奏法とイメージの関連を考える。

(イ) 実技Ⅱ「タブレットで箏の変奏曲を創作しよう」

タブレットを使いながら「初段」の冒頭「テーエントンシャン/○シャシャコーロリツ/トンテツトンシャン/チンテツコーロリツ/トンテツトンシャン」（大日本家庭音楽会発行「箏曲楽譜 六段の調」より引用）の部分をモチーフとして、「真夏の太陽の下のポップな初段」や「荒海を雄々しく進む船上の初段」等の「○○な初段」「○○の初段」として○○のイメージを基に旋律や音色、リズムを変化させ、変奏曲を創作する。

音楽科の授業においては、鑑賞教材として「初段」を用いてイメージと旋律、奏法との関連を知覚・感受したのちに、平易な「さくらさくら」や「荒城の月」などを教材とする器楽活動や、タブレットを用いた創作活動が考えられる。

なお、次年度講座は、京都府の小・中学校及び高等学校において多く配備されているタブレットを使うこととし、アプリケーションはGarageBandを用いて創作活動を行い、創作作品を発表することとして計画している。

イ GarageBandを用いた一般的な創作活動での予測される効果

- ①実際の楽器がなくても各種楽器の音色での演奏が可能となる。
- ②コロナウイルスの飛沫感染対策を講じながら管楽器の音色で演奏できる
- ③豊富なリズム音源があり、自分のイメージに合ったリズム演奏を選んで旋律に重ねることができる。
- ④自分で編集したい場合はTouch Instrumentの録音や豊富なLIVE LOOPSの選択によって手軽に楽曲を編集でき、生徒が創りたい音楽を試行錯誤しながら簡単に創作し、発信できる。
- ⑤毎時間の音楽創作データを残すことによって、形成的な評価が可能となり、生徒の創作過程での変容を確認することができる。

ウ 本活動におけるGarageBandの課題

本アプリケーションは音楽等を音源としてデータ保存し、オーディオ波形（リージョン）によって録音及び編集した音楽を可視化するので、タブレット上で音楽創作を完結する活動には有効である。しかし、本アプリケーションで創作した音楽を再度、箏によって演奏しようとする場合、編集したリージョン波形を確認しながら箏を演奏するか、あるいは創作音楽を記憶して演奏する方法しかなく、楽譜としての保存ができないことが、本活動における課題である。

本講座の実技Ⅱについて、構想当初は「初段」を編曲した楽曲を、最後に箏で演奏する企画を考えたが、創作音楽をすぐに箏で再現するには、音楽の記憶力や記譜力、箏の高い演奏技能が必要となるため、創作音楽の箏による再現は割愛した。次年度の受講者は中学校や高等学校の音楽担当者とするため、この課題に対しては記譜で補完できるので難しくないことが予想できるが一般的な生徒の活動では難しい。

また、本アプリケーションは豊富な楽器の音色は体験できる一方で、Scaleの種類として日本音階に限られている。実際の箏の演奏では琴柱を動かして各種の日本音階に調弦するが、この場合、限られた音階で音楽を創作することとなる。このため、タブレットで思考しながら創作音楽と箏の演奏を往還する活動は、箏専用のアプリケーションを使わなければ難しいと考える。このように、それぞれのアプリケ

ーションの特性を知り、授業のねらいに沿って、どのようなアプリケーションを使用するかについて検討する必要がある。

4 本年度の音楽科授業で見る「我が国の伝統音楽とICTをつなぐ創作」の実践

本年度、中学校音楽科の初任者が、題材名を「現代版『越天楽』を創作しよう」及び、題材のねらいを「『和』を感じる旋律の要素は何か」を設定し、鑑賞と創作の活動をつないで現代版の「越天楽」の旋律を創作する授業を実践した。本授業は、雅楽「越天楽」の旋律の特徴に焦点を当てて、同音や近似音に進んだり、ポルタメント（スリ上げ）でつないだりする進行や拍節感がない旋律の特徴、龍笛や箏のすどい音の入り等を知覚しながら、そのイメージや効果性を考える活動を前半のポイントとし、後半ではその効果を創作活動に生かし、題材のねらいに到達することができた。

創作の当初は、生徒がタブレットで音楽創作アプリケーションを用いた音楽創作を予定したが、「越天楽」が拍節的でなく、また微妙なピッチの変化や独特の間をアプリケーションによって表現しにくいこと等から、現代版「越天楽」の創作はリコーダーを用いて行い、尺八の「スリ上げ」「スリ下げ」の奏法を真似たポルタメントの奏法を工夫しながら、リコーダーを使って創作し、さらに、創作音楽をリコーダーで演奏する様子をタブレットで録画して、グループや学級に発信した。

雅楽「越天楽」の旋律の特徴である同音進行や近似音の進行、律音階、スリ上げ、前打音や装飾音、微妙なピッチの上下、拍感がなく音を伸ばす等の特徴を音楽で表現するには、創作音源としてリコーダーが適しており、本授業では創作音楽の演奏録画及び発信の場面でICTを活用した。このように、伝統音楽の種類や授業のねらいによって、どのような場面でICTを活用するかの指導計画が重要である。

5 まとめ

今回、中学校音楽科の目標の柱書きの「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成」を実現させる指導事例として、昨年度に続き、表したいイメージを効果的に音楽につなげる課題を設定し、本年度の当センター講座で指導方法を提示し、箏による創作実技を実施した。

本講座によって、表したいイメージを音色や旋律等で音楽につないで創作に活用する課題の効果性は受講報告や勤務校の授業実践等によって検証できたと考える。

次年度は楽曲の旋律や奏法のイメージ化に焦点を当てて、箏の実技Ⅰで幅広い奏法を習得しながら奏法とイメージの関連性を協議し、実技Ⅱの音楽創作アプリケーションを用いて「〇〇な初段」として編曲する実習を企画する。タブレットでは「〇〇」のイメージの深化とその工夫がポイントとなり、「〇〇」のイメージを原曲の音色や旋律、リズムを変えて編曲することとなる。

さまざまなイメージを基に「〇〇の初段」を発表しあうことによって、形式やテクニク等、旋律や音色以外の新しい音楽の要素の気付きも多くあると考えられる。

次年度講座では、GarageBandの特性を生かした豊富なリズムや音色を活用しながら、新しい音楽が生み出され、共有される効果性をねらっている。

伝統音楽のよさを伝える大切さと伝統音楽から知覚・感受したイメージをさらに発展

させて音楽を創作する楽しみを本講座で伝えることができると考えている。次年度講座から上記の効果性について検証したい。

音楽科の目標を実現するために、感性を働かせて音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けることが大切である。

引き続きセンター講座で、受講者が実技を通して音楽的な感受を伴いながら、音楽科指導の具体を示したい。

<参考文献>

文部科学省（2017）「中学校学習指導要領解説 音楽編」

大日本家庭音楽会発行（1998）「箏曲楽譜 六段の調」